ニュース・レター No. 4

1982 年度 年会案内	2
プログラム	2
総会議案·······	2
1981 年度 会計報告	4
Biostatistics Casebook の紹介	6
理事会議事録	7
IBC進備委員会(第2回)議事録	R

1982年 4 月

日本計量生物学会

1982年度 年会案内

日 時 1982年4月17日 9:00~17:40

場 所 統計数理研究所

プログラム

- 般講演 I 9:00~10:20

9:00~9:20 三輪哲久(農技研) 多重比較における

Multiple Range Method について

9:20~9:40 後藤昌司・上坂浩之 ベキ正規分布の特性;

(塩野義解析センター) パラメータ推定の問題

9:40~10:00 山本 脩・大瀧 茲 ベキ正規変換モデルの1つの改良;

上岡洋史・務中昌己 シミュレーションによる数値的改良と考察

(広島大・原医研)

10:00~10:20 上岡洋史・大瀧 茲・ シミュレーションによる線型判別分析の頑健性に

山本 脩・務中昌己 関する検討

(広島大・原医研)

休 憩 (10分)

- 般 講 演 Ⅱ 10:30~11:50

10:30~10:50 斉尾乾二郎(東大・農) 選抜指数の一般化とそれの推定および推量にとも

なう問題

10:50~11:10 工藤昭夫(九大・理) 近交係数の計算プログラムと隔離集団の近交係数

東 晨児・林 健児

(理大・理)

11:10~11:30 太田邦昌(東経大) 捕食者・被食者系における個体数変動のモデル

とコルモゴロフ・サミュエルソンの条件

11:30~11:50 塩見正衞(草地試) 捕食による被捕食者のSpatial Patternの変化

総 会 11:50~12:20

昼食休憩(50分)

特別講演 13:10~15:10

13:10~14:10 菱沼従尹(第百生命) 見えざる寿命革命

14:10~15:10 山本俊一(東大・医) 危険な(?) 嗜好品

休 憩 (20分)

─ 般講演 Ⅲ 15:30~16:30

15:30~15:50 林 知已夫(統数研) PARAFAC分析とイネの適応性実験

15:50~16:10 增山元三郎(理大·理) Almost-one Parameter Hypothesis of

Individuality in Height Growth

16:10~16:30 大瀧 茲・上岡洋史 原爆被爆者における慢性骨髄性白血病の

山本 脩・務中昌己 Initiation Time の推定について

鎌田七男

(広島大・原医研)

休 憩 (10分)

- 般講演IV 16:40~17:40

16:40~17:00 工藤昭夫(九大・理) 先天異常の地域分布図の利用

東 晨児・林 健児

(理大・理)

17:00~17:20 大崎 純・石居房子 刺激による個体差の変化

(山口大・医)

17:20~17:40 丹後俊郎 疾病の時間集積性について

(都臨床医学総研)

1982年度 総会議案

I. 1981 年度決算報告

Ⅱ. 1982年度予算案

Ⅲ. 役員の職務分担について

1981年度会計報告(1981.1.1~1981.12.31) 収 入 支 出 ○会 費 1,060,715 本部会費送金 511,450 79年度分 4,500 $4,500 \times 1 = 4,500$ 0 会 議 費 43,800 80年度分 4,500 ×36= 162,000 (中国) $4,545 \times 1 = 4,545$ **173, 715** ○通 信 費 98, 210 $3,585 \times 2 = 7,170$ 0人 件 費 83,600 81年度分 5,000 ×157=785,000 $4,500 \times 6 = 27,000$ o事 務 曹 27, 250 $4.000 \times 3 = 12,000$ 851,000 0 町 刷 費 183, 270 $2,000 \times 11 = 22,000$ +23ドル $1,500 \times 1 = 1,500$ 前年度未払金精算 (通信費、事務費 $500 \times 7 = 3,500$ 人件費) 99,880 中国 23 ドル×1 = 23 ドル 82年度分 $5,000 \times 3 = 15,000$ 次年度繰越金 85, 846 $4,500 \times 1 = 4,500$ +23ドル 25, 500 銀 行 1,961 $2,000 \times 3 = 6,000$ 83年度分 $4,000 \times 1 = 4,000$ 郵便局 58,500 6.000 $2.000 \times 1 =$ 2,000 小切手 9,500 ○前年度より繰越金 68, 724 銀行 54,606 現 金 15,885 郵便局 1,500 替 23 ドル 現 金 12,618 o 銀行利息 3,867 計 1, 133, 306 合 計 1, 133, 306 合 +23ドル +23ドル 1981年12月31日現在 会員数 249 名 ☆未収金 397, 300 ☆未払金 231, 790 会費 (79, 80, 81) 14,000×2 = 28,000 $9,500 \times 16$ = 174,800 「本部送金 166, 290 (80, 81) $7,600 \times 3$ 会計事務費 65, 500 (81)5,000 ×284 (81年8月~12月) 4.500×8 = 188,000 4.000×3 (80) $4,500 \times 1$ 4,500 (81) $2,000 \times 1$ 2,000 以 上 79 80 81 A В C A В C В C A 2 0 9 会員数 133 168 5 12 228 3 既納者 0 131 2 0 149 2 11 174 0 3 6 未納者 19 54 昭和57年3月12日 堀 江 Œ 樹 (1) 上記の決算は適当であり、また事実に 会計監查 美 (1) 長谷川 政

相違ないものと認めます。

1982年度予算案 (1982. 1. 1~1982. 12. 31)

収	λ		支	出	
A会員	$6,000 \times 230 = 1,380,000$ $2,500 \times 11 = 27,500$	1, 452, 500		16 ^{\$} ×230 ^人 =864, 800 11 ^{\$} × 9 ^人 = 23, 265	
し会員	5, 000 × 9 = 45, 000	0	印刷費	•	250, 000
○79, 80, 81年原	度分会費未収金	397, 300	通信費		130, 000
	1) 14, $000 \times 2 = 28,000$	0	事務費		60.000
(80, 81)	$9,500 \times 16$ $7,600 \times 3$ = 174,800	0.	会議費 ,		80,000
(81)	5, 000 ×28	0	人件費		160, 000
	$4,500 \times 8 = 188,000$	0	前年度未払金精算	\$	8
	$4,000 \times 3$		(本部会費送金-	- 人件費)	231, 790
(80)	$2,000 \times 1 = 2,000$ $4,500 \times 1 = 4,500$	0	予備費		140, 581
○前年度よりの線	成越金	91, 136			
銀	íர் 1, 961				
郵便	局 58,500				
小切	手 9,500				
	金 15, 885				
為《	替(230円×23ドル)= 5, 290			e e	
合	計 1,	940, 436	合	å † 1	, 940, 436

以上

Biostatistics Casebook の紹介

本書は、応用確率論・統計学シリーズの一冊としてWiley 社から1980年に出版された約240ページの本であり、編者として名を連ねているG. Miller、B. Efron、W. Brown、E. Mosesの4人は、いずれもスタンフォード大学の統計学あるいは生物統計学に籍を置く研究者である。題名が示す通り、本書は生物統計(というより医学統計と言うべきであろう)に関する12例のケース・スタディを集めて編まれており、そのほとんどはStanford Medical School で編者達が行なっているコンサルティングに持ち込まれた事例である。

まず、このようなユニークな本が出版されたことを喜びたい。前回のニュースレター(書評「薬効評価」)で開原成允氏が述べておられるように、応用に主眼を置いた従来の統計学の教科書と言えば「一切の理論は省略して、応用問題に従って公式を示し、それに教値を代入すれば答がでるといった型」のものが大半であり、そこで扱われている問題は「実際にはあり得ないような典型例」、D. J. Finney (Biometrics, vol. 37 (1981)、p. 416; Biostatistics Casebook の書評)の言葉を用いると"cut and dried"な数値例である場合がほとんどである。このような"きれいな"問題を扱っている限り、様々な統計的手法相互間の関連や、統計手法が前提とする仮定に関する理解が深まることは難しく、「実際に問題にぶつかって使おうとするとどの方法を使ったらよいのか全く解らなく」なってしまう。もちろん、本書によって統計的手法の処方箋が得られるわけではない。むしろ本書は、生のデータをできる限り呈示することによって、読者が解析結果をフォローし更に別の解析法をも適用できるように配慮してある点、編者達自身もまだ解析の余地はあることを認めている(時間の制約がある中で行なわれた解析結果をそのまま掲載してあることを前がきで注意してある)点において、"openーend"な性格を持つと言える。統計的手法を活用しておられる(特に医学方面の)研究者、統計学者共に、本書を批判的に読むことによって得るところは大きいと考えられる。

本書の各章はそれぞれ一つの事例に対応しており、まず簡単に医学的問題と用いられている統計 的手法の名前が挙げられている。二、三の例を示そう:

章

Prediction Analyses for Binary Data

Exploring the Influence of Several Factors on a Set of Censored Data Evaluating Laboratory Measurement Techniques 医学的問題

5種の術前変数のどれが前立腺癌の 筋転移の予測に有効か、またどの程 度正確な予測が可能か? 子宮内避妊器具の成効率に対する既 応歴の影響

臨床研究室における二種の測定法の 比較 統計的方法

ロジスティック回帰分析, 分割表解析, Mantel — Haenszel 検定, 判別分析 Kaplan—Meier 生存曲線, 打切りデータに対するCox の尤度関数 回帰分析, 許容区間, 関数 関係, 分散成分 次に、(医学的)背景とデータがかなり詳しく説明され、統計的解析およびその結論が述べられ 章によっては医学・生物学的見地からの検討や議論もなされている。

一部のデータが省略されているため、章によっては完全なフォローができないこと、分割表や生命表の解析は何回も登場するが、広い範囲に渡って統計手法を取りあげていないことなど若干の欠点はあるものの(詳しくは前述のFinneyの書評を読まれたい)、これらは本書の価値を大きく損ねるものではない。続編を期待して書評に替えることにする。

(本書はスタンフォード大学のテクニカル・レポートとして発表された(1976年, Vol. I; 1978年, Vol. II) 論文をまとめたものである。 Vol. II (1980年) のコピーが筆者の手もとにあるので興味ある方は連絡されたい。)

東大工学部 大 橋 靖 雄

第7回 理事会議事録

- 1. 日 時 1982年1月13日 18:00~20:00
- 2. 場 所 東大・工 6号館大会議室
- 3. 出席者 林知己夫、井山審也、太田邦昌、奥野忠一、後藤昌司、竹内啓、山本俊一
- 4. 議 事
 - (1) XII IBC 第1回準備委員会後の経過報告 (第2回準備委員会議事のなかに記載)
 - (2) 1982年 4 月年会の計画について

日時を4月17日(土)の1日とする。場所は統数研。

特別講演は次の2件を依頼する:

菱 沼 従 尹 氏(第百生命):日本人の寿命(仮題)

山 本 俊 一 氏(東大・医):危険な(?) 嗜好品

- 一般講演の公募を1月23日に発送。申込 / 切3月10日, プログラム発送3月20日 (Na.4 ニュース・レターとともに)。 原稿 / 切4月5日を予定する。
- (3) 今年のXI IBC Toulouse へ行く group tour の募集をすることをトラベル・インターナショナルに認める。

第8回 理事会議事録

- 1. 日 時 1982年3月19日(金) 17:00~18:00
- 2. 場 所 東大・工 6号館中会議室
- 3. 出席者 林知己夫, 井山審也, 太田邦昌, 奥野忠一; 後藤昌司, 鈴木茂, 竹内啓, 古川俊之, 山本俊一

4. 議 事

- (1) 4月17日年会のプログラム作成決定したプログラムはこのニュース・レターに記載。
- (2) 理事会の役割分担とその強化 いくつかの案が出たが、IBC 組織委の構成の一部とするために、次回まで保留。

第2回 IBC準備委員会議事録

- 1. 日 時 1982年3月19日(金) 18:00~20:00
- 2. 場 所 東大・エ 6号館中会議室
- 3. 出席者 林知己夫,浅井晃,井山審也,太田邦昌,岡崎陽一,奥野忠一,開原成允,川崎健,後藤昌司,斉尾乾二郎,佐久間昭,渋谷政昭,嶋津靖彦,新谷茂,鈴木茂,竹内啓、長谷川政美,広崎昭太,福富和夫,山本俊一,山本純恭

4. 議 事

- (1) 第1回準備委員会後の経過報告
 - 81/12/2(水) XII IBC 開催「計画概要説明書」印刷原稿作成
 - 12/14(月) 学術会議事務局より、①法人格をもたない学協会は募金団体になれない、②研連よりの副申が必要、との注意を受けた。
 - 12/17(木) 学術振興会を訪れ、「学術会議と共催」になるか、「文部省後援」を得れば、募金団体になって下さるよう依頼。
 - 文部省国際学術課長に「文部省後援」を依頼。(手続きは未だ)
 - 12/23(水) 東京理科大山本純恭教授(統計学研究連絡委員会委員長) に「統計連」 より副申を出して頂くことを依頼。
 - 12/24(木) サイマル・インターナショナルに予算書作成依頼。京都国際会議場を一応確保。
 - 12/25(金) 学術会議に「共同主催申請書」を提出、統研連からの副申も出る。

82/1/7(木) 「計画概要説明書」の改訂版作成、印刷発注。

1/16(土) 同上「説明書」 200 部を学術会議へ提出。

1/28(木) 学術会議長期計画委員会で説明、協力依頼。

2/1(月) IUBS (International Union of Biological Sciences)総会で説明, 協力依頼。

2/8(月) IUBS研連より第4部長あてに「協力依頼」文書が出る。

2/18(木) 学術会議第3,4,5,6,7部それぞれの総会で協力依頼,第1,2部 の会員にも個別に依頼。

3/5(金) 学術会議運営審議会付「国際会議主催等検討委員会」で84年に「共催」を申請している5学会代表がそれぞれ趣旨説明。なお、その後共同主催候補学会の優先順位は5学会中3位になったとの通知を受けた。

(2) Biometric Society 本部からの連絡

1) Ms. E. Thull (Business Manager)から過去5回のIBCでregister した人の数を知らせてきた(2月9日付)

1967 Australia (241), '70 (西独) 不明, '74 (ルーマニア) 280, '76 米国ボストン(574), '79 (ブラジル) 263.

この数字は同伴者をふくんでいないから、日本の場合は700人位と予想される。

2) 開催時期を84年12月7~14日と85年1月6~13日のいずれかと問うたことに対し,新 会長H. A. David から後者85年1月の方がよいと言ってきた(2月25日付手紙)。

(3) 組織委への改組について

学術会議と共催がきまれば、同会議内に「IBCのための国際会議委員会」が、当学会内に「運営委員会」が作られ、両者が合体して「組織委員会」をつくる。この「組織委員会」に「幹事会」といくつかの「部会」を構成する。部会(委員会)としては、とりあえず総務、募金、プログラム位の3部でよい。その構成の原案作成委員会委員は、林知己夫、浅井晃、奥野忠一、竹内啓、山本俊一、山本純恭の6人とする。

1982年度学会費の値上げについて(案)

ワシントンの The Biometric Society 事務局より1982年度正会員の会費について昨年度までの13ドルを16ドルに値上げするとの通知が参りました。これに伴い、また今年度に入ってからの急激な円安傾向および国内諸経費の値上がり等の事情を考え、日本計量生物学会の今年度会費を次のように定めることを提案致します。

A会員(雑誌 Biometrics 非講読会員) 2,500円

B会員(" " 講読正会員) 6,000円

C会員(" " 学生会員) 5,000円

1982年3月19日

日本計量生物学会理事会 (会計理事 太田邦昌)